

論文

学校歴から政治力への転換

——大隈重信政権下の副参政官・関和知を例に——

河崎吉紀[†]

要約：本稿の目的は、学校歴が人的ネットワークを形成し、それが政治力へと転換される過程を歴史的事例を通して明らかにすることにある。ここでは、早稲田大学出身の国会議員である関和知を研究対象とする。明治十四年の政変で政府を追われた大隈重信は、早稲田大学と『報知新聞』に投資した。前者に集った青年たちはやがて各界に出世し、卒業後も交流を通して緩やかな連帯を保つようになる。1914年、大隈が再び政権に就いたとき、彼らは大隈伯後援会を結成して、その人脈を政治力として活用した。関和知は国民党を脱党し政党というリソースを失ったものの、後援会による支援を受けて、第12回総選挙で千葉県トップ当選を果たす。さらに、司法省副参政官に抜擢され、官僚としての貴重な経験を積んだ。経済的資本に乏しい少壮議員である彼にとって、それは次なる機会をもたらす資源となった。

キーワード：学校歴、早稲田大学、大隈伯後援会

目次

1. はじめに
2. 思いは同じワセダニアン
 - 2-1. 山本権兵衛内閣の崩壊
 - 2-2. 大隈重信の下へ
 - 2-3. 大隈伯後援会結成
 - 2-4. 第12回総選挙——トップ当選
3. 司法省副参政官
 - 3-1. 島田三郎を守れ
 - 3-2. 政務官に就く
 - 3-3. 無所属団の代議士として
 - 3-4. 控訴院移転問題
 - 3-5. 人権保護に関する法律案
 - 3-6. 与党合同に向けて
4. おわりに

[†]同志社大学社会学部教授

*2020年11月9日受付、2020年11月10日掲載決定

1. はじめに

大隈重信はその回顧録『大隈侯昔日譚』で、野に下って残ったのが早稲田大学と『報知新聞』であると語っている。明治十四年の政変で政府を追われた大隈は、「こりゃ一つ気長に人材を養わねばいかぬ」と考え⁽¹⁾、小野梓に東京専門学校を作らせ、同じく下野した犬養毅、尾崎行雄らには『報知新聞』を与え政論を書かせることにした。

政治力を減退させた大隈重信が投資した、この学校とメディアの関係について、河崎吉紀は「新聞界における社会集団としての早稲田」において詳細な検討を加えている⁽²⁾。早稲田において、メディア業界への輩出率が大学の規模を統制してもなお大きいことを実証し、直接的に政府に対峙する初期の在野精神から、大衆に目を向ける間接的な影響力へ双方が成功裏に転換した同一性を指摘した。

そして、規模を拡大させた早稲田とメディア業界が、政界にどのような影響を及ぼすのか、「メディアに関連する議員の100年」において数量的な分析を試みた⁽³⁾。1890年の第1回総選挙から1990年の第39回総選挙まで100年間で当選した衆議院議員のうち、メディアに関連する議員984人を抽出し、その特徴を明らかにしている。なかでも、「メディア関連議員」において早稲田出身者が相対的に多く、彼らが一貫して政友会より改進黨系の政党に所属したことは、本稿において注目すべき結果である。ただし、その結びつきを、個々の事例に踏み込んで検証する作業は残されている。

ところで、これまで学校歴は、学歴を精密にした指標として、おもに進学や初職への影響が論じられてきた。教育年数のみで教育達成を測ると学校間の格差が見逃されるからである⁽⁴⁾。ただし、その格差は、操作的に入学試験の偏差値と置き換えられ、校風や創立者といった質的な違いや、所在地、規模などに注意が払われることは少ない。他方、学校歴は学閥の構成要因として、官公庁や企業、学校など組織の研究においても注目を集めてきた。そこでは、学校歴が排他的な人間関係を生み、組織において不当に有利な機会を与えるものと考えられている。進学や就職、昇進への学校歴の影響という、こうした従来の研究に加え、本稿では学校歴を人脈を構築する資源の一つと捉え、その政治への影響を検討したい。

そこで、事例として千葉県選出議員の関和知を取り上げる。1870（明治3）年、千葉県長生郡東浪見村に生まれた関和知は、郷校で学んだあと小学校の訓導を勤め、やがて上京して東京専門学校へ進学する。卒業後は千葉に戻り、新聞『新総房』を立ち上げ、改進黨系の若手政客として名を馳せた。さらにアメリカ留学を経て、『東京毎日新聞』『万朝報』に席を置き、1909（明治42）年、補欠選挙に出馬して国政への足がかりをつかむ。同年、結成された国民党に参加し、犬養毅の下で幹事の一人として活躍した⁽⁵⁾。

その後、関和知は国民党を離れ副参政官の地位に就く。大隈重信政権が誕生したとき、同志会、中正会、そして無所属団が連立して与党となった。犬養毅が率いる国民党はそこへ参加しなかった。同志会へ党員が流出し、勢力を減退させた恨みがその一因である。一方、無所属団は大隈伯後援会と結びつき、それなりの勢力となって大隈を支えることになる。後援会の基盤は早稲田にあった。その学校歴のネットワークは、政党というリソースを失った関和知をいかに支え、政務官の地位へと押し上げたのか。以下、事例研究として、学校歴から政治力への転換を具体的な歴史叙述のなかに描く。

2. 思いは同じワセダニアン

2-1. 山本権兵衛内閣の崩壊

大隈重信内閣が成立する前の第31議会は、1913（大正2）年12月26日から開始されていた。この議会での大きなできごとは、シーメンス事件で山本権兵衛内閣が崩壊に追い込まれたことである。関和知は1914（大正3）年2月21日の本会議で、シーメンス事件について質問をした。海軍大臣はこの事件に関するドイツ法廷の資料を取り寄せているというが、20日ほど経ったが届いたのかどうか。届いているとすればなぜ報告しないのかと詰め寄った。そして、山本首相に対し、この問題を軽く見ているのではないかと非難し、予審中だからという理由で、首相、大臣がただちに責任を取らないのは問題であると追及した。山本は「此事柄の所謂真相を待つて自ら分ること」と述べ、答える必要はないと突っぱねた⁽⁶⁾。

次いで関和知がこの議会で登場するのは、3月3日の本会議である。午後1時8分から開かれ、政府により提案された相続税法中改正法律案が検討に付されていた。議場は空席が多く、議員も眠そうに見えて惰気満々であったが、傍聴席は大入り満員となっていた。

まず、委員長が結果を報告した。1904（明治37）年に制定され1905（明治38）年から施行されているが、当時は戦時で高い税率が設定されており、その後、1910（明治43）年にいくらか減税となった。今回はさらに減税したいというのが政府案の主旨であった。花井卓蔵が家族制度を破壊するという理由で将来的には全廃を希望するという演説を行った。花井は「相続税は社会主義の税であります、社会主義は我が国体、我が国史、我法制と両立すべきものでないのであります」と述べ相続税に反対した⁽⁷⁾。委員会の提案は減税ということで全廃ではなく、花井の演説は将来に向かっての希望を述べたにすぎなかった。

しかし、関和知の考えは違っていた。法案はただちに第二読会へまわされ、彼は立ち上がって登壇し、この報告に修正案を突きつけた。関和知は花井卓蔵に反対して、相続

税が家族制度を破壊することにはならないと述べ、これは別の問題として考えるべきことであると主張し、「然らば相続税を廃すれば家族制度と云ふものは必ず安心に持続するものであると云ふ結論が出来ますか」と問いかけた。さらに関和知は金持ちの相続については政府案より増税を、少ない相続については減税をするよう要求する。これに対し、三谷軌秀がずさんな修正案であると反対意見を述べ、結局、関和知の修正案は入れられず、委員会報告どおりに可決された。

一方、シーメンス事件の余波は治まらず、3月8日の午後1時から、全国記者団主催の内閣弾劾演説会が歌舞伎座で催されることになった。聴衆は朝から弁当を持参して駆けつけ、正午には満員となり入場が締め切られるほど盛況となった。なかへ入れなかった群衆は扉を叩いて「開けろ入れろ」と殺気立った⁽⁸⁾。近くを走行していた電車は、この騒動から一時、運転を見合わせた。「警戒の警官も只呆然として為す所を知らず」といった状況であった。そこで蔵原惟郭が2階から屋外へ向かって演説を試み、千人の群衆がこれに喝采を送った。場内では関和知も絶叫した。海軍収賄によって忠愛の心と廉恥心を傷つけられた。現内閣が亡びない限り、日本国民は新たな生命を見いだせないと訴えた。

一方、国民党は第31議会が終了すると、3月27日午前11時より政務調査総会を開く。議会報告書の起草委員として、鈴木梅四郎や古島一雄、増田義一、村松恒一郎らとともに関和知が選ばれた。こうしたなか全国記者連合会は、清浦奎吾が組閣するようなことがあってはならないと、4月2日に神田青年会館で演説会を催した。聴衆は満員で大混雑となり、関和知は登壇して、大正時代において超然内閣など「大なる変態」だと叫び、政党が無気力に陥っているからだと叱咤激励した⁽⁹⁾。

2-2. 大隈重信の下へ

1914（大正3）年4月16日に第二次大隈重信内閣が成立する。関和知は喜び、「よし草履採りになつても老伯を援けて憲政樹立の犠牲とならん」という意気込みであった⁽¹⁰⁾。関和知は鈴木寅彦、森田勇次郎、西村丹次郎、大内暢三、柏原文太郎、増田義一、水野正巳らとともに早稲田出身の青年代議士の一人に数えられていた⁽¹¹⁾。彼らはまだ若く陣笠の域を出ず、また国民党に連なる者も多く政権に近づくことはできないと考えられていた。しかし、その機会が訪れたのである。ところが、犬養毅は閣外協力を約束するのみで入閣を拒み、国民党は与党として活躍することができなくなった。

1914（大正3）年4月18日午前、関和知は国民党本部に脱党届を提出した。「関和知氏は大隈内閣成ると聞いて逸早く獵官運動を開始し」と『東京朝日新聞』に報じられた⁽¹²⁾。国民党の代議士会で「告別の辞にも均しき演説」をして、関和知は犬養毅に翻意を迫ったがその効果もなく、いよいよ内務大臣秘書官に内定したので、脱党すること

になった。

郷里の千葉県からもこうした関和知の脱党を疑問視する声が出ている。佐生親次は、関和知の行動を大隈の恩顧に報いるものではあるが、官僚として居座り続けるのは良くないとして、「依然として其地位に在に至ては公人として君の心事に疑なき能はず」と述べ、国民党への復帰を勧めている⁽¹³⁾。また、雑誌『青年』の読者欄においても「旧理事関和知氏足下、足下は国民党脱党以来今日に至る何等の意見をも発表せず。特に青年協会を退去したるも何等の挨拶するあるを見ず。かくて政治的徳義を履行し得るや、小生判断に苦しむ」との意見が寄せられていた⁽¹⁴⁾。

犬養毅は1914（大正3）年5月4日午前7時に大隈重信と会見したとき、関和知の脱党について、「成程伯は此際成るべく早稲田学園関係の青年に対して進路を開拓せんとすの單純の考ならんも、這は手續に於て動もすれば誤解を生ずるの虞あり、苟も一黨員の進退に関する行為は、今後予め予に相談あるやうに致されたし」と釘を刺した⁽¹⁵⁾。

一方、アメリカの邦字紙『日米』は「木堂の入閣せざるは吾人甚だ解するに苦しむ所」と書き、犬養毅の偏屈であることを主張して黨員の苦衷を察すると記している⁽¹⁶⁾。そして関和知の脱党を伝え「隈伯に仕るは木堂に伺候するより厚きは師弟の関係上己むなき事」と擁護した。『日米評論』は犬養毅が入閣しないのは官僚系の同志会と手が組めないからで不思議ではないと説明したうえで、関和知が内務大臣秘書官となったことも自然であると記している⁽¹⁷⁾。また、『読売新聞』の「時事小観」には「犬養の門下中関は温厚の長者として知られたる人」であり、脱党は奇怪に思えたが、内務大臣秘書官となったことで面白いと思ったとの感想が寄せられた⁽¹⁸⁾。

そして、関和知自らこの脱党についての理由を『世界之日本』誌上で次のように説明した。大隈重信は国民党と直接の関係がないとはいえ、遡れば「開祖たり本尊」ともいえ、日頃の主義主張も多く異なるところがない。加えて犬養毅との関係は師父、門弟子たる深きものがある。「故に今や大隈内閣が成らば、我が国民党は当然其基礎ともなるべき必然的關係があるものと思惟した」と関和知は振り返る⁽¹⁹⁾。犬養も率先して献身的な盡力を惜しまないと信じていたが、入閣を拒んでしまった。国民党の大多数の代議士は犬養の入閣を希望していた。しかし、彼は採決も行わず意見も聞こうとしなかった。しかも、「黨員を入閣せしめず」という代議士会で決まっていなかったことまで決議として発表した⁽²⁰⁾。関和知は不快に感じたという。桂太郎内閣を倒すとき政友会と提携しておきながら、同志会と提携できないというのは納得できなかった。こうしてやむを得ず国民党を去り自由の身となったのだと釈明した。

こうして、1914（大正3）年4月18日、関和知は大隈重信内閣の内務大臣秘書官となった。児玉亮太郎に代わり任ぜられたもので、高等官三等となった。

この頃の関和知は「君は学問もあり弁舌もあり、どんな問題にも意見を立て得る人」

として実力を認められながらも「土百姓のやうな風采」という評判であり、見た目はあまりぱっとしなかったようである⁽²¹⁾。大隈重信が総理大臣秘書官にしようとしたところ、参内のときに関和知の風貌では困ると綾子夫人が反対し内務大臣秘書官に回されたのだという噂話まで広まった。関和知は性格もおっとりして物事にせかず、交際しやすい人柄で敵がいないと見られていた。

1914（大正3）年5月3日午後6時より、上野精養軒で早稲田大学有志による招待会が催された。大隈重信の勧誘で内務大臣秘書官に就いたことを早稲田の校友たちは了解した。関和知も政局の模様を大いに語り、すこぶる有益な会合だったという。

ここで少し大隈重信と関和知の関係を振り返っておきたい。

郷里でまだ新聞『新総房』を切り盛りしていた頃のことである。同紙に「大隈伯」と題する論説を載せ、大隈重信を初めて訪ねた思い出を語っている。早稲田を卒業してから2年ほどたった1897（明治30）年4月、門馬信義と上京して、霞ヶ関の官邸に会いに行った。部屋で待っていると続々と来訪者が訪れる。お茶も出されないまま待たされ、ある者は明日に、ある者は明後日に会う約束をして退散する。ようやく関和知と門馬は呼ばれて応接室に通された。大隈は杖をつき左手を腰に立っていた。挨拶をして椅子に座る。大隈は両足に杖をはさみ、右手にパイプを持って、いろいろな話をしてくれたという。国民が政治家を信じて任せているだけではだめで、国家のために自ら考えるようであればならない。「国民は御者にして、政治家は馬の如きもの」であると関和知に説いた⁽²²⁾。また、日本における急務は教育であり、学問がなければ立憲政治を運営することままならないと語った。大隈の話は尽きなかったが、登省するため係の者が喚びに現れたため、関和知と門馬はその場を辞したという。

また、1897（明治30）年8月18日発行の『新総房』8号では、「隈板二伯と青年」と題して、板垣退助と大隈重信を論じている。豪傑が青年に与える影響は大きいという。板垣は「政治家としての資格に於て全く無能力者」であることは世の中が認めているが、維新の功績と「自由の文字を抽象せる、一知半解の民権論者」としての影響力はもつ旧時代の豪傑である⁽²³⁾。今もその大言壮語に踊らされる青年がいる。関東自由党青年大会の暴れぶりにそれが現れている。関和知は彼らを「狂癡者の群」と呼び、非常に野蛮な運動であるときき下ろす。しかし、今時、過激な青年を煽動しても憐れに思うばかりである。一方で大隈は、関東自由党青年大会の三日後に、東京専門学校で青年に次のように述べていた。社会にでれば失敗することも多いだろうが、それに負けず、それを元に経験を積んで成功を目指せばよい。「複雑なる社会の大洋に於て航海の羅針盤は何であるか、学問だ」と語った⁽²⁴⁾。同じ豪傑でも大隈の影響は板垣とは異なるという。

卒業後も関和知は早稲田とのつながりを大切にした。1909（明治42）年11月6日、小春日和のなか、千葉町の衆楽館において聴衆約2,000人を集め、早稲田大学学術講演

会が執り行われた。空前の盛況であった。浮田和民、塩沢昌貞、島村抱月らが訪れた。校友として関和知、そして浦辺襄夫が出迎えた。一行は梅松旅館でしばし休憩の後、会場に入り、聴衆は続々と押しかけ廊下や場外にまであふれ出した。関和知も「保護国関係」と題して演説を行う予定であったが、時間が切迫していたため挨拶と概要を述べるにとどめた⁽²⁵⁾。終了後、校友と有志は梅松別荘に場所を移して晚餐を取った。校友を代表して吉田銀治が挨拶をした。宴会は非常に盛り上がり、十分に歓談して夜の9時頃に散会となった。また、翌年1910（明治43）年12月11日には、早稲田大学千葉県校友会が講演会を開き、その後、梅松別荘に集まった。もちろん、関和知も参加した。国民新聞記者の野城久吉や、東京通信社の吉田五市などメディア関係者もいた。『新総房』の経営を援助していた浦辺が晚餐会の挨拶を行い、関和知ら代議士の当選を祝った。

早稲田大学恒例の擬国会にも参加している。これは早稲田の政治科に所属する学生の演習として行われた模擬議会である。1911（明治44）年3月18日は学生のみで行い、翌日19日は政界の名士を呼んで催す。内閣は犬養毅が首相を務め、内務大臣に箕浦勝人、大蔵大臣に加藤政之助らが就いた。議長は高田早苗である。急進党の総理は島田三郎、保守党の総理は長谷場純孝だった。保守党役が提案した海軍拡張案に対し、欧米の海軍拡張に逆上した狂者の論であると急進党役の栗山博が猛烈に反論する。さらにパナマ運河や諸国の形勢について論じだしたので、「大風呂敷！」と野次が浴びせられた⁽²⁶⁾。そのうち関和知は保守党議員として海軍拡張案を建議した。サザエを例に「熱火の上の栄螺が危機刻々身に逼るを知らず尻の熱さに蓋を開けて初めて熱火の上に在るを知るの愚」と、戦争が始まってからでは遅いと拡張案を支持し、急進党をなじった⁽²⁷⁾。その演説は莊重にして滑らかな論調だったという。

1913（大正2）年5月17日には、大隈重信が千葉県の早稲田校友会の招きに応じて、午前8時30分両国駅発の列車で浮田和民、田中穂積らと来葉した。もちろん、鶴澤宇八、柏原文太郎らとともに関和知も大隈に随行した。校友会を代表するのは浦辺襄夫と吉田銀治であり、彼らもまた関和知若かりし頃からの仲間である。9時30分に千葉駅に大隈が到着すると、告森良千葉県知事らが出迎えた。そのほか500人ほどが千葉駅に詰めかけていた。そこから千葉中学校へ向かい講演会を催した。来場者は生徒を含め約2,000人が集まっていた。大隈は「世界の大勢と日本の進歩」と題して講演し⁽²⁸⁾、会場を医学専門学校へ移して1,000人に迎えられ、そこでも約1時間の大演説を試みた。一行は梅松別荘にて記念撮影を行い、そこでは田中、浮田らが演説を行った。そして、引き続き官民合同歓迎会が午後5時より開かれ、350人を集めた大宴会となった。『新総房』代表の佐瀬熹六の姿もあった。大隈一行は午後7時40分の列車で帰京した。

このように関和知は早稲田大学を卒業後も大隈重信を慕い、早稲田の仲間を大切にしてお人脈を維持することに努めてきた。ついに国民党を抜けることになったが、それ

はやむを得ないことであった。大隈は1914（大正3）年5月21日正午から無所属代議士となった関和知を、浜岡光哲、田中辰之助、星野錫らとともに官邸に招待し、茶菓を振る舞い懇談する機会を作った。6月4日には大阪で大隈伯後援会が結成される。第二次大隈内閣は同志会や中正会を与党として成立したが、議会の多数は政友会であった。来るべき選挙戦を見据えつつ、早稲田関係者は大隈を支える組織の構築を考え始めた。

2-3. 大隈伯後援会結成

1914（大正3）年6月14日、大隈重信の総理大臣就任を祝うため、午後2時30分より大隈邸の後ろの庭で早稲田大学校友有志大会が開かれた。当然、関和知も出席した。1,000人に近い人々が参加した。大隈は「諸君吾輩が七十七老軀を掲げて天下に呼号せる所以のものは身を以て憲政有終の美を実現せんが為であるのである」と叫んだ⁽²⁹⁾。割れんばかりの拍手喝采が大隈の演説に捧げられた。

同じ千葉県出身で関和知と学生生活を共にし、彼の同志でもあった実業家、浦辺襄夫が演説を行った。浦辺は「茲に校友の有志を中心として広く同志を集めて、及ばずながら後援を致したい」と述べて大隈伯後援会の設立をその場にいる聴衆に訴えた⁽³⁰⁾。千葉県からはほかに中村尚武や、梅松別荘の主人である三和弥三郎なども駆けつけた。

その後、6月19日には規則が定まり、東京にも大隈伯後援会が結成された。この組織が地方の後援会を束ねる本部として機能していく⁽³¹⁾。当初、麴町にある浦辺襄夫の事務所を後援会の事務所にあてた。浦辺は会計担当として幹事を務めることになった。

浦辺襄夫は1873（明治6）年、千葉県夷隅郡に生まれた。1897（明治30）年に東京専門学校政治科を出て、西村勝三が経営する皮革業の桜組に事務員として就職した。月給13円の最下級から辛抱強く勤め上げ、日露戦争で軍需品を一手に引き受け資金を得ると株式に投資して財を作り、その後、副支配人に昇進して経営者となった。「友誼厚く後輩の青年を引立て寔に其慈愛の念に深く、又同志は君をして県会議員衆議員たらしめんとして屢々候補に推薦さるゝも名利は其欲するところにあらずとて屢々之を辞退せり」と評判だった⁽³²⁾。

大隈伯後援会は6月14日の校友有志大会の様様を冊子にまとめ、全国約8,000人の校友に配布した。6月28日、大隈伯後援会は日比谷の大松閣に早稲田出身の代議士を招待して協力を求める。こうしたなか、関和知は6月20日、従五位に叙せられている⁽³³⁾。

1914（大正3）年7月28日、第一次世界大戦が始まった。イギリスとの交渉を進める外務大臣・加藤高明について、遅々として参戦が進まないことにいらだった人々は、関和知に大隈重信を訪問して内情を聞き出すよう依頼した。そこで彼が訪問したところ、大隈は「加藤が平常無愛相なる為め、種々疑惧の念を抱く者もあるが、加藤の政治

的力量、外交的手腕は斯かる難局に当つて、初めて能く發揮せらるゝのであつて、毫も憂ふるの要はない。此機に於ける帝国の外交方針は、既に確定して動くものでない。安心して然る可しである」と述べたという⁽³⁴⁾。そして、8月23日、日本はドイツに宣戦布告した。

9月15日、大隈伯後援会は中正会、そして無所属の代議士らと懇談会を催している。また、9月16日には関直彦ら国民党の代議士、9月17日には同志会、無所属の代議士と懇談を繰り返した⁽³⁵⁾。10月10日には生命保険協会で第5回の委員会を開いており、関和知も出席して意見を述べている⁽³⁶⁾。そして、10月17日に大隈重信の自邸で第一次発起人会を開き、67人が出席した。浦辺襄夫が開会の辞を述べた。

11月19日には関和知のお膝元である千葉県にも大隈伯後援会が組織された。役員は憲政本党時代からの仲間で、『新総房』主筆も務めた吉田銀治が引き受けた。後援会の千葉県における拠点も吉田であった。11月29日には佐賀県でも大隈伯後援会が組織され、関和知は内務大臣秘書官・代議士という肩書きでその発会式に参加している。午前11時より佐賀市公会堂で行われた。霜の降りる寒い日であったが、参加者は午前10時の段階ですでに2,800人を数えていた。会則などが読み上げられた後、関和知は登壇して、大隈重信に代わって謝辞を朗読した。なかには涙を流して聴き入る老人の姿もあった⁽³⁷⁾。その後、山道襄一、小山谷蔵らと関和知の大隈内閣を応援する演説が行われ、午後2時に閉会后、午後6時より一行は2,800人が参加する大懇親会に招かれた。こうして12月までに地方の後援会設立は33か所に上った⁽³⁸⁾。

関和知、高木正年、紫安新九郎、金尾稜巖、市川文蔵ら国民党を脱党した議員たちが作った進歩倶楽部は1914（大正3）年12月5日、議会終了後に会合して大隈重信内閣の施政に賛成する宣言書を発表している⁽³⁹⁾。また、12月19日は、神田青年会館で都下各大学の学生団体である丁未倶楽部の主催により現内閣擁護、政友会攻撃の演説会が催され、関和知と高木も招待された。さらに、かつて関和知が雑誌『新総房』を発行したとき、記者として参加していた渡辺外太郎⁽⁴⁰⁾が1915（大正4）年3月に『大隈老伯』を編集して出版した。渡辺自身早稲田の出身で友人の関和知や、杉田駿、菅三郎、桜井轡三、酒井醇一と諮ってこの本を作ることにしたのだという⁽⁴¹⁾。

2-4. 第12回総選挙——トップ当選

1914（大正3）年12月25日、政友会と国民党の反対により二個師団増設案が否決された。これをもって首相の大隈重信は議会を解散した。総選挙は翌年1915（大正4）年3月25日に実施されることになった。

関和知は脱党してからも国民党の態度を賞賛していた。政友会と犬養毅は親密ではなく、大隈重信や与党と同じく政友会を嫌っているのだろうと思っていた。ところが、

「苦節」という自らの面子を立てるために、一年兵役論などという妙な案をもち出して、政友会とともに政府の増師案に反対し、衆議院の解散を招いた。「勿論国民党が政友会といふ大党を引摺つて、到々断末魔の淵に飛込んだ事は、結果から見れば感謝すべき事だが、其動機なるものを考ふる時には、実に愛想もこそも盡き果たる政党である」と記し、関和知は現実の政治を見ようとしない頑迷な国民党を批判した⁽⁴²⁾。

この頃、千葉県の政友派、非政友派は拮抗しており、県会議長を交互に選出するまでになっていた。それゆえ、争いも多かった。「壮漢を駅内外に配置し、停車場に下車したる者を暴力によりて事務所へ拉し去る」ようなことが起こった⁽⁴³⁾。こうしたなか議会在解散され、千葉県の政界は一気に色めき立った。

関和知の千葉県での住所は当時、長生郡東浪見村綱田にあった。本拠地の長生郡は、板倉中が多少の票を握っていたが、板倉が政友会から離れたため、票の行方はわからなくなっていた。関和知については、当選間違いなしという者もいたが、油断なく地盤を守る事が第一であると慎重な声も上がっていた⁽⁴⁴⁾。とはいえ彼自身も、国民党を脱党しているわけであり、地元の大成倶楽部など非政友派の支援をあてにした無所属での出馬であった。

当時、同志会の小寺謙吉に勧誘を受けていたが同志会には入らなかった⁽⁴⁵⁾。一方、国民党を脱して同志会に転じた鶴澤宇八や小林勝民もこの大成倶楽部をあてにしていた。大成倶楽部が公認するのは7人に対し、それを欲する者16人という盛況ぶりであり、紛擾は避けられないことから、同倶楽部は東京において秘密裏に公認候補を選考することにした⁽⁴⁶⁾。

大成倶楽部は11月23日午後1時半から、千葉町の梅松別荘で演説会を開いている。500人の来場者を集め、「本倶楽部創立の趣旨に基き大隈伯後援会と一致の方針を執る事」を決議し⁽⁴⁷⁾、浦辺襄夫が大隈重信の謝辞を朗読した。また、同志会の加藤高明、大浦兼武、大石正巳、島田三郎からの祝電も披露された。当日は大蔵大臣の若槻礼次郎が出席して演説を行ったほか、関和知をはじめ小林勝民や鶴澤宇八など非政友派の議員が演説を行い、午後6時に閉会したのち懇親会を催している。

若槻礼次郎は「選挙事務の方は、安達謙蔵が東京にいて、元締めをやっており、あっちへ行ってくれこっちへ行ってくれと注文する。「おれだって動物だから、そうはゆかん」と言っただけくらい、私など席の温まるいとまなく全国的に駆け回った」と選挙戦の応援の忙しさについて当時を振り返っている⁽⁴⁸⁾。そもそも、閣僚が遊説のために全国を駆け巡るというようなことは、これまでにはあまりなかったことであり、まして総理大臣の大隈重信自らが前線に出陣して、列車から車窓演説まで行ったのは前代未聞であった。

1915（大正4）年1月17日には大隈重信を筆頭に各大臣が出席する大演説会が上野

精養軒で開催された。入り口には紅白の幕が張られ、花を胸に挿した委員たちが右往左往していた。演壇には梅松の鉢が飾られ、大隈の席、閣僚の席、代議士の席が設けられた。参加者 2,000 人以上の大盛況である。「関和知、蔵原惟郭などといふ代議士連中も俺等の天下だといふ顔をして揚々として乗り込んで来る」と『東京朝日新聞』に記されている⁽⁴⁹⁾。大隈は顎を上に向け、拍手と万歳を浴びて意気昂然と入場した。尾崎行雄、若槻礼次郎、加藤高明などが壇上で演説を行い、最後に大隈が「得意満面で十八番の広長舌を振り二千の会員を煙に巻いて終つた」という⁽⁵⁰⁾。翌日 1 月 18 日は午後 1 時より大隈伯後援会の全国大会が大隈邸の庭で催された。ここでも 300 人ほどの来賓、800 人の参加者がつめかけ、いよいよ総選挙に向けての旗揚げとなった。浦辺襄夫は委員を代表して会務の報告を行った。関和知は大隈伯後援会から専属で推薦を受けた⁽⁵¹⁾。

一方、千葉県では 1 月下旬に非政友派が梅松屋に集まり、公認候補を決める予定であった。すでに 1 月中旬、泡沫候補の整理を終えており、関和知は「真面目なる候補者」の一人に数えられていた⁽⁵²⁾。そして、1915（大正 4）年 1 月 24 日、午後 4 時半から開かれた大成倶楽部の代議士公認候補選定会で、関和知、鶴澤宇八、小林勝民が問題なく選ばれた。ほかの 4 人については議論が噴出し後日、選定委員を選んで決定することになった。

長生郡においては、関和知を推薦することに躊躇はなかった。1 月 4 日、白井喜右衛門が茂原町の武田楼に国民党系の幹部を集めて協議し、1 月 10 日に大会を開いて決めることにした。白井は長生郡豊栄村の出身で、千葉県の改進黨、進歩党、国民党と改進黨系の領袖として長年活躍してきた人物で、しばしば県会議員としても当選し、また佐原町長も務めた地方名望家である。非政友派の地域内政治団体である長生倶楽部は、予定どおり、茂原町蔦屋において選定大会を開き、関和知を推薦することに決定した。そして、中央の大隈伯後援会と、千葉県の大成倶楽部が協同して政友会を排斥するという決議を採択した。

長生倶楽部の支持をもって長生郡は押さえた。しかし、前回、匝瑳郡で関和知を支援した向後四郎右衛門翁がもうこの世にいない。夷隅郡は金網丞など有力者によって後援を得られるだろう。ともかくあと 500 票は欲しいところであった。

『東京朝日新聞』の関和知への評価は「人格、学識に不足なく、一定の主義政権を有して、口に筆に遺憾なく国民の意見を代表し得る者」であった⁽⁵³⁾。もし輸入候補が当選するようなことがあれば、それは関和知のせいではなく、選挙民の判断が不名誉なのだという。ただし、関和知には金がなかった。前 2 回の選挙でも次点であり、補欠によって幸運をつかんだにすぎない。同情する県民は多くいたが、黄金によってなびく者も存在すると分析している。

千葉郡は 2,800 人ほどの有権者を擁するが、特定候補の地盤として確立されておら

ず、熾烈な選挙戦が予想された。非政友派では榎本次郎右衛門、中村尚武、関和知、無所属の板倉中などが進出している。山武郡は政友会の鶴澤聡明、非政友派の関和知、中村が争う場であるが、ほかの候補も乗り込んでくるに違いないという状況であった。

こうしたなか、匝瑳郡の匝瑳倶楽部が関和知を支持することに決めた。もともと国民党を支えてきた匝瑳倶楽部はもちろん、国民党に唯一残った柏原文太郎を後援するはずではあるが、関和知にも公認を与えることを決めたのである。もっとも、関和知はこの公認を辞退している⁽⁵⁴⁾。とはいえ、有志は一度決議したものだから応援するのだと意気込んだ。

1月下旬、山武郡の非政友派はだれにも公認を与えていなかった。君塚順之助か、関和知かどちらを推薦するか決めかねていた。山武郡の非政友派は、関和知を応援する者を「理想派」と呼び、君塚を応援する者を「現実派」と称していた⁽⁵⁵⁾。理想派はもとより理想選挙を実現しようと画策しており、そのための演説会まで準備していた。もともとは青年会が発端で、山武郡理想団として結成され、青年会長の石井貫一が運動を取り仕切っていた。当初は政派の別なく理想選挙を行わせるところに目的があった。

のちに関和知は「青年団と修養」と題する一文を大町桂月編『大町大正青年読本』に寄せている。地方青年団は従来、産業の振興や農業の改良を主眼として組織されてきたが、道徳上の修養も必要である。「道徳上の修養ある国民として、欧米諸国民に對等の地歩を占めることは、なか〜容易の業ではない」と記し⁽⁵⁶⁾、徳性を涵養するような活動を地方の青年会に期待した。

いよいよ関和知は出陣することになった。1915（大正4）年1月30日午後2時より、千葉町千葉寺において第一回政見発表演説会を開いた。続く、2月5日は印旛郡八街村、2月6日は長生郡茂原町で演説会を開く予定であった。尾崎行雄司法大臣、高木正年が応援に駆けつける手筈となった。

予定どおり、2月5日午後1時より、印旛郡八街公会堂において政見発表演説会を催した。高木正年は「選挙の責任」、尾崎行雄は「議会解散の意義」と題して応援演説を繰り広げた⁽⁵⁷⁾。2月6日の午前には山武郡の東金町にて、午後には長生郡の茂原町で同様の演説会を催すことになっていた。さらに関和知は夷隅郡でも演説を行った。そこから2月中旬にかけて長者町、勝浦町、国吉村、大多喜町などを遊説する計画を立てた。また、2月16日には、山武郡松尾町の公会堂にて、正午から政見発表演説会を開くことになっており、『万朝報』から黒岩周六が駆けつける手筈であった⁽⁵⁸⁾。

すでに1月12日、大隈重信の自邸にて大隈伯後援会全国大会が催されていた。その席上で遊説部の発足が行われた。遊説部はその後、全国を6区に分けて4名1隊として全339回の演説を展開した⁽⁵⁹⁾。さらに個人による応援も2月から3月にかけて行われ、関和知の元には都筑懋績や比佐昌平ら計7人が派遣され10回の応援演説が大隈伯後援

会遊説部から行われた⁽⁶⁰⁾。彼らは千葉県における非政友派の中村尚武や鈴木久次郎、鶴澤宇八、小林勝民、榎本次郎右衛門らも応援し、遊説部から千葉県へは20人の弁士と34回の応援演説が投入されている。関和知はそのうちの約3割を受けており、いかに大隈伯後援会が彼に力を入れていたかが窺える。

公認候補を決しかねていた匠瑳倶楽部は、2月20日の午後1時から総会を開き、ようやく満場一致で関和知を推薦することを決定した。関和知は山武郡から午後7時9分着の列車で八日市場駅に降り立ち、後援者らに迎えられ今後の方針を協議した。

こうしたなか、尾崎行雄は千葉県の非政友派に引っ張りだこであった。2月20日の午後3時30分より安房郡北條町で演説会を開いて約2,000人を集め、2月22日は誕生寺を参詣し、一行は関和知を応援するため大原町へ向かっている。また、同志会、中正会、大隈伯後援会などの候補者を調整する中央選挙会が2月23日午後4時より帝国ホテルで開かれ、関和知も出席している。大隈伯後援会の全国における立ち上げは加速し、2月の時点で25か所、3月には30か所が新たに設けられていった⁽⁶¹⁾。早稲田大学出身の有志は2月21日午後2時より、東金町八鶴館に集合し、校友の関和知、中村尚武を応援することを宣言した。とりわけ、理想選挙を求める人々が八鶴館を本拠地にして関和知を支持し、同じ山武郡でも藤の家に集まった非政友派は同志会の中村を助けたが、後者は候補者を多く立て、この機に乗じて政友会に打撃を与えたいと考えていた⁽⁶²⁾。

1915（大正4）年2月24日、25日にわたり、大成倶楽部は会合をもち、代議士候補として小林勝民、関和知、鶴澤宇八の前代議士らに加え、鈴木久次郎、榎本次郎右衛門、君塚順之助を公認候補として推薦した。3月15日付『東京朝日新聞』に各候補の当落予想が出ている。そこではすでに「当選確実の人」と関和知は報じられている。「今日の形勢を以て推さば当選者と見ざる可らず、殊に政友の鶴澤聡明氏と無所属の関和知氏とは共に高点の競争者と目せられ居れり」と予想されていた⁽⁶³⁾。鶴澤聡明、中村尚武、関和知の争う山武郡では、鶴澤が約2,000票、関和知が700から800票と見られ、中村が苦戦を強いられる展開となっていた⁽⁶⁴⁾。

潤沢な選挙資金5万円を標榜した君塚順之助は、非政友の各郡地盤を脅かすものと見られ、敵視されて逆に引きずり下ろされつつあった。他方、関和知は各郡から歓迎され2人分の票を集め、ますます意気盛んとなり、「非政友公認候補間の憎まれ者となり不徳義なり友情なしなどの悪口を浴びせられ」ていたが⁽⁶⁵⁾、人気は高まる一方であった。とはいえ、「碌々たる秘書官の地位を得たいばかりに歴史ある国民党を去るとは見下げた奴だ」との評価もあった⁽⁶⁶⁾。裏切り者とする人々もいた。

3月17日午前10時より、関和知は長生郡一宮町において政見発表演説会を開いている。ここでも『万朝報』の黒岩周六らが駆けつけている。終了後、関和知は黒岩らと長

生郡本納町へただちに移動し再び演説会を催した。同日の『東京朝日新聞』は、関和知が長生郡に1,400か1,500票、山武郡に1,000票、香取郡に500票、東葛飾に200票、印旛郡に500票、千葉に300票、君津に200票、夷隅に300票を獲得すると予想する⁽⁶⁷⁾。

ここにきて印旛郡和田村の有力者である円城寺栄亮が、関和知を応援することになり、同郡の得票は500票を超えるのではないかと予想された⁽⁶⁸⁾。円城寺も東京専門学校出身で地方政治につくし、村長や郡会議員を務めてきた。同年9月には千葉県会議員ともなる。円城寺はもともと国民党を応援しており柏原文太郎の後援者だったが、自身が県会議員の当選とともに同志会へ入ることになった。今回の選挙でも「支那浪人上りの柏原君と亜米利加帰りの関君との間に劇しい鏖引の幕が演ぜられた」というように⁽⁶⁹⁾、どちらを応援するかに注目が集まっていた。関和知は秘書官になったことなどを逐一円城寺に電報で伝え、手紙を送るなどして懇意となるよう努めていた。

関和知は3月22日午後1時から夷隅郡国吉町法勝院で政見発表演説会を開くことにした。そして最後の舌戦は3月24日の午後1時半より、千葉町の梅松別荘にて催すことで締めくくられた。千葉県で泡沫候補を除き17人の候補者が繰り広げた演説会は、全部で190回にのぼった。そのうち30回を催した政友会の吉植庄一郎が1位で、関和知は21回の2位、国民党の柏原文太郎が20回の3位だった⁽⁷⁰⁾。関和知はそのうち山武郡で7回、夷隅郡で6回、長生郡で5回と集中的にこれらの地域を攻めている。そして、3月25日、投票が行われた。

当日の『東京朝日新聞』は次のように報じている。「関和知氏は長生、山武を主として各郡に同情を有し最高点候補者の一人として算へられつゝあるも氏の地盤は鞏固なるものに非ず、只弱きを援くる人気に投じたるものなれば若し氏の勢力にして優れんか再び此の人気を失ふが如き有らんかと機関紙は頻に油断のならぬ戦況を報じつゝあれど実際の形勢より見るに鶴澤総明氏に亜ぐ者は氏を措いて他に求むる能はず、されど本日の狩出し如何が結果に大なる変動を生ずべき事勿論なり」⁽⁷¹⁾。この日の朝、関和知はダメ押しで千葉町の有権者全員に「クセンタノム」と電報を打った⁽⁷²⁾。

あれだけ頑張った山武郡だったが、開票結果を見ると関和知は167票しか取れておらず、1,448票の同志会・中村尚武が1位、次点が政友会・鶴澤聡明で1,211票だった⁽⁷³⁾。しかも、関和知の選挙運動を手伝った運動員の御須兵三郎が選挙法違反で取り調べを受けた。もっとも、選挙違反の嫌疑は関和知だけでなく、ほかの候補者の運動員にもかけられていた。とはいえ総合的な結果は、関和知のトップ当選だった。速報では4,234票をとって1位、2位は中立の加瀬喜逸で4,005票、3位が同志会の榎本次郎右衛門の3,667票だった。最終的に関和知の得票数は5,165票、2位の榎本次郎右衛門3,667票に対して1,498票の大差をつけた⁽⁷⁴⁾。

この第12回総選挙ではこれまで政友会が多勢であった千葉県でも、政友会の当選者は10人中2人とふるわず、同志会が4人、国民党が1人、中正会が1人、関和知と板倉中は無所属で2人といった顔ぶれとなった。大隈重信内閣は第一党の同志会が過半数に達しないため、中正会、大隈伯後援会と無所属の連立によって支えられることとなった。そして、1915（大正4）年4月1日、大隈伯後援会は無所属団を結成する。関和知ら国民党を脱党した議員たちが作った進歩倶楽部も、この無所属団へ加わるようになった。同年の暮れ12月27日にこの無所属団は公友倶楽部と改称する。

1915（大正4）年4月24日、午後5時より日比谷松本楼で、早稲田大学の千葉県人会が校友の当選代議士を祝い、また卒業生、新入生の歓送迎会を催している。関和知も中村尚武とともに出席し、約60人が集まる盛会となった。また、5月21日には、校友二水会の例会にも来賓代議士として招かれている。午後5時より日本橋の偕楽園で開催され、特別会開催時の議会ということもあって、多数が来会した。

5月28日には午後5時より築地の精養軒で、高田早苗の貴族院議員勅選を祝う校友大会が開かれ、あわせて校友の衆議院議員当選を祝すというので関和知も参加した。ほかに早速整爾、大隈信常、田川大吉郎、頼母木桂吉、小山松寿、小山東助など、その後も関和知と戦線をとともにする人々が集まった。「学校直系の早稲田出では降旗が一番先輩で、その次は早速、関和知」と報じられるように、関和知は早稲田系として世間に認められていた⁽⁷⁵⁾。『早稲田学報』には「思ひは同じワセダニアン（省略）奮闘努力の甲斐ありて議政壇上の人となつた同窓の光栄を賀せんとて、定刻前より接踵来会せるワセダニアン堂に満ち」と記されている⁽⁷⁶⁾。

1914（大正3）年に『大学と人物』を出版した錦谷秋堂は、早稲田の活躍の舞台は言論界と政界だというのが、「不幸にして政治舞台に於ける早稲田軍の活動振りは未だ容易に世人の注目に値ひするの域に達しない」と記している⁽⁷⁷⁾。とはいえ関和知と山道襄一に対する評価は高く「僕の見所只早大出身と云ふ許りでなく同志会内の有力者として将来大に望みある二人者であると思ふ」と記し、雄弁家で機略に富み学識ある点などでは少々軍配を関和知にあげたいところだが深く探ってみると花たり難く月たり難いと評価している⁽⁷⁸⁾。

関和知も早稲田人脈とのつながりを大切にしており、校友大会にも積極的に参加し、あるいは大隈重信の提唱により設立された社交クラブである早稲田倶楽部などにも顔を出すなど交流を続けてきた。

一方で、参政閑人編『列伝シクジリ代議士』には、関和知の風貌は「質屋の番頭」のようでハイカラにはなれないが、犬養毅を棄てて大隈についたことで秘書官になることができた。選挙運動では「大々的上等の紙に大隈伯の大々の推薦の文字を書いて選挙民へ配つた」ので、ふだんは貧乏な関和知が奮発してこのようなものを配ることができる

のだから、大臣も近いのではと選挙民のほうもだまされたのだろうなどと論じた。もつとも、最高点で当選したと聞かされても、関和知自身が半日は信じなかったという⁽⁷⁹⁾。

3. 司法省副参政官

3-1. 島田三郎を守れ

特別会の第36議会は1915（大正4）年5月20日から招集された。その最終日、6月9日の本会議は、政友会と国民党が議長・島田三郎に対し不信任案を突きつけるというので、開会前から殺気立ち、傍聴席は大入り満員となっていた。

政友会の斎藤珪次が議長不信任動議を提出した。すかさず中正会の田川大吉郎が発言を求め、速記録ができてから議論してはどうかと提案し、斎藤も賛成して一時延期となった。また、同志会の小林勝民が議員懲罰の動議を提案して、昨日の議場における斎藤の演壇から議長へ放った暴言、議案書類を散乱した件について、懲罰委員に付すべきであると怒りの声をあげた。また、蔵内治郎作が指名点呼中に閉鎖を破って退場し、制止しようとした守衛を蹴倒したことも懲罰の対象だと訴えた。

田川大吉郎が懲罰委員会開催のため日程変更は行われるのかと質問すると、議長である島田三郎はまごついた。そこへ小林勝民が日程変更も含まれていると発言し、島田もそれを追認したため、政友会、国民党は「議長無能」を絶叫して大騒動となった。議員たちは扇子などで机を叩き、床を踏み鳴らし、「ノーノー」「ヒヤ〜⁽⁸⁰⁾」の大騒ぎを繰り広げた。

田川大吉郎がさらに政府案の日程はどうなるのかと問いかけ、島田三郎はしどろもどろとなり、議場は「混乱又混乱鼎の湧くが如く蜂の巣を崩したるが如し」となった⁽⁸¹⁾。とはいえ、懲罰委員会の動議をなんとか成立させ、島田は11時30分にやっとのことで休憩を宣告する。午後に再開すると日程変更の動議が通り、島田は降壇して副議長で和服姿の花井卓蔵に席を譲った。斎藤珪次は議長不信任案を改めて提出した。これに対し、無所属団の津原武が島田は公正を期していると主張し、一方、国民党の望月長夫は単に不慣れというのではなく、議長としての能力がないと非難した。

ここで関和知が登場する。国民党を裏切ったとして、議席からは「男子恥を知らず」「厚顔驚くに堪へたり」との声があがった⁽⁸²⁾。彼は次のように発言した。議長・島田三郎君に対する不信任案に絶対反対である。政友会、国民党の提出したこの不信任案は「議員全体の品位名誉に関する重大なる問題であります」と叫んだ。すると、「其品位を上ぐる為の問題なり」「喧ましい黙れ」などと野次が飛んだ。国民党は不信任案を絶えず議会に出してきたが、政友会はそれに対して無責任の言論などとこれまで反駁してきたのではないかと関和知は反論する。しかるに政友会が野党になれば、毎日、不信任案な

どを出して議場を混乱させている。議長の島田君は政友会の望月圭介君が「議場に於て、聞くべからざる不穩の言葉」を発しても、寛大に公平に扱ったではないか。昨日は斎藤珪次君が議事録について「三百代言人が、字句の末、末節に拘泥して」いるかのような軽躁にして、仰々しい議論を展開していた。「党派の心を離れて議会の面目を重んずる心あるならば、議長に於て多少遣り違ひがあったと雖も、己自らの平生の品位、又昨日来の行動に顧みて、斯の如きことは退いて自ら戒むれば議場の秩序は立ちどころに恢復し、帝国議会の品位面目は大に茲に揚るのであります」と関和知は島田を擁護した⁽⁸³⁾。

さらに中西六三郎が不信任案に賛成し、片岡直温が反対の演説をして、「衆議院は議長島田三郎を信任せず」という決議案に無記名投票を行った結果、投票総数327、否とするもの211、可とするもの116で議長不信任案は否決された。島田はようやく打ち解けた顔となり、直ちに副議長の花井卓蔵と席を替わり議長席に着いた。

その後も、武藤金吉が演説を禁止され退場を命じられたが、自席にかじりついて守衛の言うことを聞かないなど、与野党の議場における混乱は続いた。すったもんだの波瀾のあげく、午後8時50分、紛擾を極めた第36議会（特別会）はようやく最終日程を終えて幕を落とした。『大阪朝日新聞』は「殊に島田議長に対する政国両党の態度の如き、寧ろ卑怯の沙汰なり」と書いて、島田三郎が公平な態度をとっているのに乗じて政友会や国民党が議場を混乱におとしめたと批判した⁽⁸⁴⁾。

3-2. 政務官に就く

1915（大正4）年4月30日、勅令第57号で明治神宮造営局官制が公布されていた。関和知はこの造営局に5月1日から7月1日まで参事として任命された。参事は内務大臣の奏請により内閣において任命されることになっていた⁽⁸⁵⁾。これは大隈重信が参政官の制度を整備するまで、関和知に与えたポストであった。

すでに新聞においては、人事についての予想が報じられていた。内務大臣は大浦兼武であり、下岡忠治が代議士として当選したので、内務省の参政官に就くだらうと考えられ、秘書官であった関和知は内務省の副参政官になるのが筋であるが、「関氏は大隈伯直系の人物にて大浦内相とは親分兇分の関係なく且又其の思想の経路に於て大なる懸隔あり」と『東京朝日新聞』は記したうえで、それでも関和知の任命は確実だろうと報じていた⁽⁸⁶⁾。

どうやら逋信大臣の武富時敏が関和知を気に入っていたようで、当初、逋信省の参政官にという声もあった⁽⁸⁷⁾。『東京朝日新聞』によれば、関和知は逋信省の参政官となる予定であったが、国民党を脱党して自由にやり過ぎであるとのことから、千葉県会の同志支部員が反対して任命が見合わされたという。無所属のくせに出世が早過ぎるという

意見もあった。しかし、特別会の第36議会における議長・島田三郎擁護の演説や、「頭脳の明晰なる点に於て未来ある党人の一人に数へられつゝある事なれば」⁽⁸⁸⁾、何とかして副参政官にしたいという閣僚の意向があり、当たり障りのない司法省に回されるということらしい。

ともかく、参政官の獵官運動は激しいものがあり、照りつける太陽のなか、田川大吉郎、早速整爾ら議員たちは夏の東京を狂わんばかりに駆け回ったという。田川は司法省参政官、早速は海軍省参政官となっている。関和知は最初から正副どちらかの参政官になると見られており、内務大臣官邸を訪れた人に次のように語った。「イヤどうも恐縮だね新聞の辞令丈けは沢山頂戴したが真物の辞令は怪しいものだ、兎に角なつてもならんでも早く決定しないと毎度新聞紙上に晒物になるので閉口だ」⁽⁸⁹⁾。争われるには理由がある。副参政官は勅任官の位であり、高額の年俸が与えられるからである。

1915（大正4）年7月2日の閣議において、正副参政官の任命が決定し、関和知は内務大臣秘書官から司法省副参政官へと任命された。参政官は1914（大正3）年に各省官制通則、および特別任用令を改正して勅任官として設けるよう定められた新設のポストである。政党员に政府委員として議会での答弁を行わせ、経験を積ませることが目的であった。また事務官が議会での答弁に多忙を極め、事務が滞ることを解消する狙いもあった。

関和知は「政界切つての貧弱で関君の夫人などはいつも自ら質屋の門口へ大風呂敷を抱へて現れた」と記されるほどで、副参政官として官舎に住まい、俸給がもらえるというのはなによりありがたいことであった⁽⁹⁰⁾。いずれにせよ、司法大臣の尾崎行雄の下に、「酒も飲まず、煙草も喫はぬ野暮天の基督教徒」である参政官の田川大吉郎、「敦実却つて優れる」副参政官の関和知という組み合わせで司法省は進むことになった⁽⁹¹⁾。

関和知は「政治的清教徒」として、犬養毅の歓心を買うよう御殿女中式に努めてきた人であり、千葉県という党弊が多い場所にしては珍しい議員だと山口孤剣から評価されている⁽⁹²⁾。また、国民新聞記者の杉中種吉は、「関和知君は、重厚質実の人、其の器は大ならざるも、相応の学識もあれば品格もあり、其弁や達者と云ふにあるらざるも、鋭気もあれば重みもあり」と見ていた⁽⁹³⁾。

尾崎行雄、田川大吉郎、関和知はいずれも新聞記者を経験した議員である。大隈重信内閣は大蔵大臣の武富時敏、通信大臣の箕浦勝人、文部大臣の高田早苗などメディア業界に関与した人物が多かった。参政官で新聞にたずさわったことのある人物はほかに、町田忠治、安達謙蔵、早速整爾、大津淳一郎、加藤政之助がおり、副参政官には紫安新九郎や荒川五郎なども新聞業界出身の議員であった。

また、東京の有力な新聞代表者が視察のため1915（大正4）年10月に渡米した際、関和知は大隈重信にこの計画を伝え、大隈は松井外務次官を呼んで便宜を与えるよう指

示し、関和知はほかにも通信省や農商務省とかけ合って、彼らが渡米できるよう計らった⁽⁹⁴⁾。もちろん、排日問題も含めた日米の問題解決に向けた活動の一環であった。帝国ホテルで9月24日に盛大な送別会を催し、参政官の田川大吉郎とともに関和知も日米問題解決の希望を語って送り出した。また、関和知はサンフランシスコの記者団にも応援を頼んだ。

3-3. 無所属団の代議士として

関和知と高木正年、紫安新九郎、金尾稜巖は、1915（大正4）年5月29日、無所属団の公友倶楽部のうち与党合同に賛成するものと見られた議員20人に連絡を取り、5月30日の午後3時から大井町の川崎屋で会合をもった。12人が出席した。合同に反対する者もいて、この日は議論が百出し、意見はまとまらなかった。

6月19日、関和知は島田三郎とともに、議会報告を地元で行う大隈信常の応援で前橋市へ向かっている。また、7月25日には、若槻礼次郎、大津淳一郎らと神戸商業会議所で午前10時より立会発会式に参加し、午後から聴衆1,500人の前で演説を行った。無所属の代議士ではあるが、関和知は他党との連携のなかで活動を進めていた。

1915（大正4）年8月3日、午後4時から帝国ホテルで無所属団が代議士会を開いた。関和知も出席した。無所属団として声明を出すべきだとの意見も出されたが、少数にて否決され、第三党へ流れるも自由だがほかを勧誘してはならないことなどを申し合わせた⁽⁹⁵⁾。8月10日、大隈重信は内閣を改造した。関和知は司法省副参政官として留任した。その翌日、8月11日午後3時より、帝国ホテルで無所属団の公友倶楽部は政務調査会を開き、農商務省から事務次官を招いて予算説明を受けている。

また、1915（大正4）年11月25日、東京の千葉県人が発起して、石井菊次郎の外務大臣就任祝賀会を築地の精養軒で催した。関和知も参加して演説を行った。石井は太田和齋の芦村塾における関和知の先輩であり、アメリカ留学中や列国議会同盟会議の際などに同じ千葉県人として交流があった。

3-4. 控訴院移転問題

さて、第37議会が1915（大正4）年12月1日に始まる。まず、司法省副参政官として、関和知の仕事には裁判所の移転や設立への要望があった。12月20日の審議に政府委員として出席し、長崎控訴院の移転などについて説明を行った。九州の控訴事件を扱うには長崎は地理上不便であり、また建物も老朽化していることから、福岡に移転したいと提案した。まず、佐賀のほうが交通の中心であるという異論や、広島控訴院も廃止するののかとの質問、そして熊本に対する統計的資料の要望など、議員のそれぞれが誘致のための発言を繰り返し、その日は終了となった。

翌日 12 月 21 日は午前 10 時 8 分に開会する。太田恆之が質問した。長崎控訴院を移転する理由に建物の老朽化があげられているが、実際に行ってみるとそうは思えない。福岡の裁判所は最近に建てられたもので、そこへ新たに控訴院と合併した建物を造るのは無駄ではないか。福岡はその費用を寄付すると申し出ているが、役所の建物を寄付でまかなうような競争は良いものではない。「司法省の便利であれば、金さへ持って来ればどこへでも持って行くと云ふ非常に誤った方針になって居らぬか」と問いただした⁽⁹⁶⁾。関和知は長崎の建物が老朽化していることは事実であると説明し、福岡への移転は事件数や利便性から判断していると回答した。

しかし、誘致合戦は収まらない。長崎選出の議員たちが党派を超えて移転案に反対し始め、それに対して福岡選出の議員たちが政府案を通過させるための運動を起こし、その争いは熾烈となった。同志会は司法次官の鈴木喜三郎に反発して否決を目指し、政友会も司法大臣の尾崎行雄に不信任を突きつけ、国民党も尾崎を困らせるため否決多数となった。もちろん中正会は尾崎を支持して賛成であり、関和知も公友倶楽部で熱心な運動を行い賛成を取りつけるなど、大騒ぎとなった。

1915（大正 4）年 12 月 22 日、正午より院内の控室で公友倶楽部は代議士会を開き、この裁判所移転問題を取り上げた。奥村七郎が賛成演説を行い、関和知が質問に答え、大池忠助、田村新吉を除く全員が政府案賛成の申し合わせを行った。こうした関和知の必死の取り組みに与党側の議員には同情する者も多く、他方、司法省参政官の田川大吉郎は、長崎選出議員であるため身動きが取れない状態となっていた。

結局、日程を変更して 12 月 23 日の本会議にかけられることになり、委員長の鹿島秀磨は政府案に反対の報告を行った。投票総数 302、委員長の報告を可とする者 164、否とする者 137 で、長崎控訴院の福岡への移転は否決されてしまった。

3-5. 人権保護に関する法律案

次に関和知が登場するのは翌年 1916（大正 5）年 2 月 26 日の本会議である⁽⁹⁷⁾。高木益太郎らが提案する「人権保護に関する法律案」「刑事訴訟法中改正法律案」について委員会の報告があった。検事や警察官など犯罪捜査に関わる公務員に制限を加え、人権を尊重させようとする法律案である。審議の結果、修正案が出された。

高木益太郎は、警視庁の捜査員が報道機関に捜査状況を漏らしたこと、留置場に南京虫が発生している問題、取り調べで拷問など残酷な処置がとられていることについて質問した。そして、かつて 1914（大正 3）年 1 月 16 日に「犯罪捜査に関する法律案」を加瀬喜逸らと提案したとき、賛成者の一人には関和知もいたと発言した。高木は登壇前に関和知のところへ行き、こうした事実を突きつけるとなかば脅し文句をたれていた。

司法大臣の尾崎行雄は実際どのような対策を講じているのか、「尾崎司法大臣は民間

に居らるゝときには憲政の神様と言はれた人であるが、現在に於てどう云ふ点が神様としての御利益であるか」と詰め寄った。警保局長の湯浅倉平は、捜査状況を漏らした点については嚴重に戒めている。南京虫の駆除にも努めていると答弁し、議場からは「官権蟲を取締れ」などと野次が飛んだ。尾崎も、担当者を集めて懇切に説明を与え、万が一問題があれば処分を行っていると答えた。

ここで関和知が登壇する。「賛成か反対か」と議場から声が上がった。「参政官だから賛成だらう」と野次が飛んだ。関和知が卓上に書類を広げると高木は「法務局長原稿を作る」と叫び⁽⁹⁸⁾、国民党の佐々木安五郎が「関和知之を読む」と続けたので笑い声が広がった⁽⁹⁹⁾。

関和知は修正案に反対の立場をとった。人権保護は重要だが、法を改めるほどのものではない。捜査員の横暴についてはすでに刑法が処分を定めている。その処分は修正案が求めるものと同じであり、重複している。そして、「提案者は尊敬するところの法律家諸君が多いのであります、其尊敬するところの諸君にして斯様な案を掲げ来って、其の目的を達することを所期せられるに至っては、余りに事情に疎いことではないか」と皮肉を述べた。犯罪捜査上作成した文書は証拠とすることができないという提案だが、「裁判手続の根本的是は破壊である」と関和知は告げ、文書が使えないのでは逐一、裁判所は証人を呼ばなければならない。経費のうえからいっても無理だろう。以前に同種の法案に賛成したときは、巡査が抜刀して人を負傷させるような横暴な時代であったが、現内閣でそのようなことはないと言断した。

さらに、望月長吉が、刑法とこの法案の修正案は異なるのではないかと職権濫用を防止する刑法の条項で、恐喝や詐言も適用できるのかと関和知を追及した。関和知は刑法と同じであると信じていると答え、「解釈に付てはそれへの所見に依るので」などと発言に勢いがなくなり、別の機会に争いたいと逃げた。もっとも、その後、斎藤隆夫が尾崎行雄の無能を主張して与党内に内紛が発生し、関和知の答弁もうやむやになった。

3-6. 与党合同に向けて

公友倶楽部の幹事会が1916（大正5）年3月9日午後3時半から帝国ホテルで開かれ、関和知も参加して今議会の報告書の草案を協議した。第二次大隈重信内閣を支える与党である同志会、中正会、そして公友倶楽部は合同への動きを模索しつつも、同志会と中正会には反目し合うところがあった。公友倶楽部には同志会や中正会への合同をくろむ議員と、三党鼎立を理想として新党結成に反対する議員がいた。中正会の尾崎行雄は、関和知や高木正年を通して公友倶楽部を引き入れようと画策していた。

一方、与党大合同の動きは与党三派の早稲田大学関係者が集う水曜会にも働きかけた。しかし、そのようなことに使われる会なら脱会するという議員が多数出たため、水

曜会の世話人はそうではないと弁明し、これまでどおり開催することになった⁽¹⁰⁰⁾。このとき合同に賛成したのは桜井兵五郎だけで、関和知や紫安新九郎、小山松寿などはいまだ態度を決めかねていた⁽¹⁰¹⁾。

第37議会が終了して、大隈重信は3月26日、静養中の山県有朋を小田原に訪ね、加藤高明を次期首相に推薦していた。しかし、4月8日、山県はそれを拒否する⁽¹⁰²⁾。大隈は寺内正毅にも同志会と提携するようもちかけたが、交渉は進展しなかった。7月に入ると、同志会と大隈伯後援会は超然内閣を拒否していると報じられた。8月6日、寺内は同志会との提携は不可能との返事を大隈に返す。

こうして、同志会、中正会、公友倶楽部の三派が合同して新党を結成し、それを元に加藤高明を首相へ押し上げるという構想が動き始めた。ただし、公友倶楽部の一部は8月25日、合同反対を申し合わせており、他方、大隈重信は26日と27日に、公友倶楽部の代議士、約半数を早稲田の私邸に招き合同を勧めた。関和知は高田早苗、下岡忠治、大隈信常とともに、招待する側に回って接待した。27日12時から昼食をともにして、大隈は三派合同の必要を説き、高田は「実業界関係諸君は此際須らく政党に力を盡し以て党弊の打破政界の革新と共に国利民福の増進に盡すべき」と訴えた⁽¹⁰³⁾。9月9日の時点で、公友倶楽部のうち北陸組の斎藤喜十郎、横山章、今村七平、桜井兵五郎が新党に参加することを決めていた。

1916（大正5）年9月18日、高田早苗から加藤高明、尾崎行雄に正式な提案がなされ、三派から合同に向け2人ずつ交渉委員を出すことが決まった。同日午後1時から公友倶楽部、大隈伯後援会の人々が高田の下に集まり、合同に参加する者を確定した。もちろん、関和知もそこに含まれる。

さらに勧誘を進めることになり、高田早苗も個別の説得にあたり、北陸から関西へは大隈信常、頼母木圭吉らが勧説に向かった。関和知は九州・四国方面を担当した。彼は九州組の吉田磯吉を説得に行ったが謝絶されてしまう⁽¹⁰⁴⁾。しかし、奥村七郎、三浦得一郎らは参加することになり、総体として効果は上がっていた。関和知は香川県に田淵貞四郎を訪ねて熱心に勧誘し、1916（大正5）年9月21日には合同に参加することを決めさせている⁽¹⁰⁵⁾。9月24日、大隈重信は高田と武富時敏を呼んで後継者として加藤高明を奏薦することを伝えた。

9月25日午前10時、関和知も含め、公友倶楽部の合同派が高田早苗の下に集まった。勧誘についての報告と、今後の活動を決めたのち、新政党創立準備委員として大隈信常、今西林三郎、高木正年を選出した。翌日9月26日、大隈重信は参内して辞意を内奏する。あわせて加藤高明を後継内閣首相として推挙した。そして、10月4日に大隈は加藤を推挙した辞表を提出したが、山県有朋はこれを認めず、元老会議は寺内正毅を後継首班に決定した。

4. おわりに

1914（大正3）年に大隈重信内閣が成立したとき、関和知は国民党も与党の一翼として参画するものと予想した。しかし、犬養毅はそれを拒み閣外協力に留まる。そこで関和知は、国民党を脱党してでも大隈の下へ馳せ参じる途を選んだ。大隈もこの若き千葉県改進黨系の代議士に期待をかけ、さっそく内務大臣秘書官に引き立てる。もちろん、国民党は関和知に変節だとして罵声を浴びせかけた。こうして彼は無所属となり、政党というリソースを失った。

とはいえ、その政治力の減退を補うものが、大隈重信との個人的なつながりだけであると考えるのは早計である。政党を脱した関和知に対し、早稲田大学の有志はただちに招待会を催し、その行動に賛意を示している。東京専門学校を卒業後も、関和知は早稲田とのネットワークを大切にしてきた。大学恒例の擬国会に参加して在学生との交流を深め、講演会を企画して地元千葉県に大学関係者を招いた。早稲田卒という学校歴は、少壮議員を支える人脈の一つとして担保され、やがて、本格的に政治力へと転換される日がやってくる。

大隈重信の総理大臣就任を祝うため、早稲田大学校友は結集し、関和知の同郷で同窓生の浦辺襄夫が大隈伯後援会の立ち上げを宣言した。浦辺は千葉県の実業家で、関和知が本拠とするメディア、新聞『新総房』を後援する同志であった。その浦辺が前面に出て、早稲田という学校歴の力を、大隈を支える組織、すなわち政治力へと転換する牽引役を買って出た。

その力を余すところなく発揮したのが、第12回総選挙であった。関和知は同志会や中正会とも連携しながら、大隈伯後援会専属の推薦を受けて選挙戦に臨んだ。地元政治結社の支援も取りつけ、『万朝報』の黒岩周六などからの応援も受けて、関和知は千葉県でトップ当選を果たす。当選後に開かれた高田早苗（早稲田大学学長）の貴族院議員勅選を祝う校友大会には、関和知をはじめ早速整爾、大隈信常、田川大吉郎、頼母木桂吉、小山松寿、小山東助など早稲田系の政治家がずらりと居並んだ。

さっそく、特別会の第36議会で、政友会と国民党は衆議院議長となった島田三郎に議長不信任案をもって妨害し始めた。扇子で机を叩き、床を踏みならして大騒ぎを繰り返す。関和知は国民党から裏切り者呼ばわりされつつも、登壇して島田三郎を擁護する演説を行った。

関和知は当初から、正副いずれかの参政官に就任するだろうとみられていた。激しい獵官運動のなか、島田三郎を擁護した演説なども評価され、彼は司法省の副参政官に任命される。無所属の代議士で作った公友倶楽部のうち、元事務次官の下岡忠治が内務省

参政官につくのは当然としても、次いで、関和知が選ばれたのは厳しい競争を勝ち抜いた結果である。

当時も後世も参政官への評価は低い。先行研究では、制度それ自体のもつ意味や、意義、制度設計など大きな枠組みにおける政策の位置づけが明らかにされてきた⁽¹⁰⁶⁾。内閣改造で党人派が参政官に就いたことや、続く寺内正毅政権下でこのポストが用いられなかったことなど、総じて効果はなかったという。したがって、個々の参政官にまで踏み込んだ検証はほとんど行われていない。

では、関和知の副参政官としての活動はいかなるものであったのか。おもな取り組みに控訴院移転問題がある。提案は否決されてしまったが、政府委員として発言し、政党間の調整を行うなど尾崎行雄司法大臣を補佐し、政務官としての務めを果たした。ほかにも、人権保護に関する法律案などで答弁を担当した。制度として実績を残せなかった参政官も、少壮議員に官僚としての経験を積ませるといふ貴重な機会を提供した。それは政治家のキャリアにとっては実績となり、人的資本の蓄積につながった。

このように、大隈重信が蒔いた「教育」という種は、早稲田大学を通して学校歴のネットワークを形成し、彼が76歳で組閣したとき本格的に政治力へと転換された。関和知はその政治力の一端に支えられ、国民党を脱党してもなお、第12回総選挙を乗り切り副参政官の地位へと上昇する。そこででの経験は短いながらも、経済的資本に乏しい関和知に人的資本、すなわち官僚としての経験を与えた。やがて、同志会、中正会、公友倶楽部が合同し憲政会を結成するとき、関和知は高田早苗（元早稲田大学学長）に導かれ、新党への参加を決意する。そして苦節10年、幹事長、総務を経て、加藤高明政権下で再び政務官の地位へと舞い戻るのであるが、その行方については、いずれ稿を改めて論じよう。

付記

本研究はJSPS 科研費20H04482の助成を受けたものです。

注

- (1) 『大隈侯昔日譚』早稲田大学出版部、1969年、162頁。
- (2) 河崎吉紀「新聞界における社会集団としての早稲田」猪木武徳編『戦間期日本の社会集団とネットワーク——デモクラシーと中間団体』NTT出版、2008年。
- (3) 河崎吉紀「メディアに関連する議員の100年——『衆議院議員名鑑』における数量的分析」佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員——〈政治のメディア化〉の歴史社会学』創元社、2018年。
- (4) 学校歴に加え、専攻分野が及ぼす影響に踏み込んだ研究もある。たとえば、豊永耕平「出身大学の学校歴と専攻分野が初職に与える影響の男女比較分析——学校歴効果の限定性と専攻間トラッキング」『社会学評論』69巻2号、2018年など。
- (5) この時期の関和知については、河崎吉紀「国民党の若手代議士——関和知と関旗打破」『評論・社会科学』134号、2020年を参照。
- (6) 「第三十一回帝国議会 衆議院議事速記録第十四号」『官報号外』1914年2月22日、265頁。

- (7) 「第三十一回帝国議会 衆議院議事速記録第十八号」『官報号外』1914年3月4日, 372頁。
- (8) 『東京朝日新聞』1914年3月9日, 4面。
- (9) 『読売新聞』1914年4月3日, 11面。
- (10) 『房総日日新聞』1925年2月21日, 2面。
- (11) 安藏生「早稲田大学出身者の勢力範囲」『新公論』27巻6号, 1912年, 15頁。
- (12) 『東京朝日新聞』1914年4月19日, 2面。
- (13) 佐生親次「関和知君」『青年』3巻6号, 1915年, 156頁。
- (14) 『青年』2巻7号, 1914年, 79頁。
- (15) 犬養木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝』中巻, 東洋経済新報社, 1939年, 245頁。
- (16) 『日米』1914年4月19日, 3面。
- (17) 不觸野生「木堂の進退」『日米評論』1914年4月26日, 2面。
- (18) 『読売新聞』1914年4月19日, 3面。
- (19) 関和知「憲政の為に惜しむ」『世界之日本』5巻6号, 1914年, 45頁。
- (20) 同書, 46頁。
- (21) 二宮楚川「正副参政官評判記」『太陽』21巻10号, 1915年, 133頁。
- (22) 白洋子「大隈伯」『新総房』6号, 1897年, 26頁。
- (23) 関白洋「隈板二伯と青年」『新総房』8号, 1897年, 12頁。
- (24) 同書, 14頁。
- (25) 『新総房』1909年11月9日, 2面。
- (26) 風塵郎「早稲田擬国会の印象」『雄弁』2巻4号, 1911年, 204頁。
- (27) 「早稲田議会」『早稲田学報』194号, 1911年, 10頁。
- (28) 『早稲田学報』220号, 1913年, 5頁。
- (29) 『東京朝日新聞』1914年6月15日, 5面。
- (30) 『早稲田大学校友有志大会記事』黒川九馬, 1914年, 21頁。
- (31) 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』早稲田大学出版部, 1991年, 146頁。
- (32) 木村清吉編『房総医家名鑑——附・房総人物名鑑』安井融平, 1912年, 25頁。
- (33) 東洋新報社編『大正人名辞典』東洋新報社, 1917年, 1645頁。
- (34) 関和知「難局にも従容自若たりし大隈侯」『大観』5巻2号, 1922年, 158頁。
- (35) 前掲, 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』, 149頁。
- (36) 『大隈伯後援会第一次発起人会記録』大隈伯後援会第一次発起人会, 1914年, 22頁。
- (37) 「日本全国大隈伯後援会記事(一)」『新日本』5巻1号, 1915年, 68頁。
- (38) 前掲, 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』, 152頁。
- (39) 『東京朝日新聞』1914年12月7日, 4面。
- (40) 奥付には「渡部」とある。
- (41) 渡部外太郎編『大隈老伯——其経歴と政見』衆星社, 1915年, 小引1頁。
- (42) 関和知「所謂苦節とは何ぞや」『世界之日本』6巻3号, 1915年, 38頁。
- (43) 細井肇『政争と党弊』盆進会, 1914年, 152頁。
- (44) 『東京朝日新聞』1915年1月7日, 3面。
- (45) 『新世界』1914年5月11日, 7面。
- (46) 『東京朝日新聞』1915年1月8日, 3面。
- (47) 『東京朝日新聞』1914年11月24日, 2面。
- (48) 若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史——古風庵回顧録』講談社, 1983年, 209頁。
- (49) 『東京朝日新聞』1915年1月18日, 5面。
- (50) 同書, 5面。
- (51) 『大隈伯後援会報告書』大隈伯後援会, 1915年, 20頁。
- (52) 『東京朝日新聞』1915年1月14日, 3面。
- (53) 『東京朝日新聞』1915年1月21日, 3面。

- 54 『東京朝日新聞』 1915年3月17日, 3面。
- 55 『東京朝日新聞』 1915年2月9日, 3面。
- 56 大町芳衛編『大町大正青年読本』 青年修養会, 1917年, 150頁。
- 57 『東京朝日新聞』 1915年2月6日, 3面。
- 58 『東京朝日新聞』 1915年2月13日, 3面。
- 59 「大隈伯後援会遊説部の活動」『新日本』 5巻5号, 1915年, 49頁。
- 60 同書, 56頁。
- 61 前掲, 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』, 152頁。
- 62 『東京朝日新聞』 1915年8月17日, 3面。
- 63 『東京朝日新聞』 1915年3月15日, 3面。
- 64 『東京朝日新聞』 1915年3月16日, 3面。
- 65 『東京朝日新聞』 1915年3月18日, 3面。
- 66 『東京朝日新聞』 1915年3月20日, 3面。
- 67 『東京朝日新聞』 1915年3月17日, 3面。
- 68 『東京朝日新聞』 1915年3月22日, 3面。
- 69 『東京朝日新聞』 1915年11月29日, 3面。
- 70 『東京朝日新聞』 1915年3月25日, 3面。
- 71 同書, 3面。
- 72 『東京朝日新聞』 1915年3月30日, 3面。
- 73 『東京朝日新聞』 1915年3月27日, 3面。
- 74 政戦記録史刊行会編『大日本政戦記録史』 政戦記録史刊行会, 1930年, 493頁。
- 75 一記者「改造内閣と新大臣(六)」『羅府新報』 1926年6月10日, 2面。
- 76 『早稲田学報』 244号, 1915年, 12頁。
- 77 錦谷秋堂『大学と人物——各大学卒業生月旦』 国光印刷出版部, 1914年, 165頁。
- 78 同書, 166頁。
- 79 参政閑人編『列伝シクジリ代議士』 大日本新聞学会出版部, 1916年, 172頁。
- 80 演説で賛意を表現するときに「ヒヤヒヤ (Hear! Hear!)」とのかけ声を用いた。反対は「ノーノー (No! No!)」である。
- 81 『大阪朝日新聞』 1915年6月10日, 1面。
- 82 「第三十六回帝国議会 衆議院議事速記録第十五号」『官報号外』 1915年6月10日, 301頁。
- 83 同書, 302頁。
- 84 『大阪朝日新聞』 1915年6月10日, 1面。
- 85 内務省神社局編『明治神宮造営誌』 内務省神社局, 1930年, 65頁。
- 86 『東京朝日新聞』 1915年4月22日, 4面。
- 87 二宮楚川「正副参政官評判記」『太陽』 21巻10号, 1915年, 125頁。
- 88 『東京朝日新聞』 1915年7月4日, 3面。
- 89 『日米』 1915年7月7日, 2面。
- 90 『読売新聞』 1915年12月17日, 5面。
- 91 山口孤剣「正副参政官を論ず」『新日本』 5巻8号, 1915年, 139頁。
- 92 同書, 139頁。
- 93 杉中種吉「大正政界の新進人物」『新日本』 5巻11号, 1915年, 320頁。
- 94 『新世界』 1915年10月12日, 3面。
- 95 『読売新聞』 1915年8月4日, 2面。
- 96 「第三十七回帝国議会衆議院 裁判所ノ設立及移転ニ関スル法律案外二件(大正二年法律第九号中改正法律案 明治三十二年法律第七十号中改正法律案) 委員会議録(速記) 第三回」 1915年12月21日, 11頁。
- 97 「第三十七回帝国議会 衆議院議事速記録第三十四号」『官報号外』 1916年2月27日, 787-793頁。

- (98) 『東京朝日新聞』1916年2月27日, 4面。
- (99) 同書, 2面。
- (100) 『読売新聞』1916年3月29日, 2面。
- (101) 『羅府新報』1916年4月19日, 5面。
- (102) この間の経緯は, 勝田政治「第二次大隈内閣と憲政会の成立」早稲田大学大学史編集所編『大隈重信とその時代——議会・文明を中心として』早稲田大学出版部, 1989年が詳しい。
- (103) 『東京日日新聞』1916年8月28日, 3面。
- (104) 『東京朝日新聞』1916年9月9日, 2面。
- (105) 『東京朝日新聞』1916年9月24日, 2面。
- (106) 加藤高明が政務官の設置を構想し, 参政官として実現させる過程については奈良岡聰智『加藤高明と政党政治——二大政党制への道』山川出版社, 2006年を参照。また, 政党と官僚を対立構造と見ない視点から参政官を論じたものに, 清水唯一朗『近代日本の官僚——維新官僚から学歴エリートへ』中央公論新社, 2013年がある。

Historical Example of Deriving Political Power from College Selectivity :
SEKI Kazutomo, Vice Parliamentary Secretary in 1915-16

Yoshinori Kawasaki

This article aims to clarify the process by which college selectivity engenders a human network, which is then converted into political power. We will consider the career of the Waseda University graduate and politician SEKI Kazutomo as a historical case. OKUMA Shigenobu, who was ousted from the government due to the political crisis of 1881, invested in Waseda University and *the Hochi Shimbun* newspaper. After graduating from Waseda University, these young people pursued various fields, and maintained solidarity through exchanges. When OKUMA regained power in 1914, they formed the Okuma Supporters' Association and utilised their connections as political power. Although SEKI Kazutomo lost the resource of a political party, he won the coveted prize of Chiba prefecture in the 12th general election, with the support of the Okuma Supporters' Association. Additionally, he was appointed Vice Parliamentary Secretary of the Ministry of Justice in the Okuma administration and gained valuable bureaucratic experience.

Key words : College selectivity, Waseda University, Okuma Supporters' Association